

令和 6 年 6 月 7 日現在

機関番号：33910

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2021～2023

課題番号：21K00612

研究課題名（和文）宣教師によるキリシタン・ローマ字文献の表記法の実態解明

研究課題名（英文）A Study on Japanese Romanization of Japanese Christian Documents

研究代表者

千葉 軒士（Chiba, Takashi）

中部大学・創造的リベラルアーツセンター・准教授

研究者番号：00736580

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、16世紀後半から17世紀初頭にかけて来日した宣教師たちが作り上げたキリシタン・ローマ字文献における日本語表記法の観察を行った。従来のキリシタン文献を用いた研究は、主にポルトガル語で記されたイエズス会の資料から見た日本語表記の実態を反映したものであり、当時少数ながらも同様に日本で活動していたスペイン語で記されたドミニコ会の資料の視点をも十分に含んだものではなかった。また、イエズス会の資料で、写本と版本で書写方法が異なるように、ドミニコ会の資料にも写本と版本があり、それを十分に踏まえた上で、日本語表記方法の変遷をとらえた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

キリシタン・ローマ字文献における日本語表記法を広く確認し、宣教師たちがどのように日本語を捉え、それをどのように記していたのかという表記の変遷過程について、その実態の一部を解明することが出来た。この成果により、当時の日本語実態を多角的に捉えることが可能となり、より総合的な見地からの研究が可能となる。また当時の日本語教育の実態把握にも大いに寄与するであろう。また、今回の研究の為に作成したデータは日本語学研究のみならず、日本語教育史、日本文化史、日本文学史、日本史といった他分野の研究にも有用な資料となる。

研究成果の概要（英文）：This study examines the Japanese notation system in Christian documents written in Roman characters by missionaries who came to Japan in the late 16th and early 17th centuries. Conventional studies using Christian documents have examined Romanized Japanese notations, focusing on materials from The Society of Jesus, but have not sufficiently focused on Dominican materials. This study also examines the differences in notation between manuscripts and Jesus Mission Press documents among The Society of Jesus and Dominican materials and discusses the changes in the Romanized Japanese notation system.

研究分野：日本語学

キーワード：キリシタン文献 ローマ字 写本 版本 ことばの和らげ

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

16 世紀に日本を訪れたポルトガル系のイエズス会の宣教師たちは、日本各所で布教するために、日本語を十分に理解する必要があった。キリスト教では教えを説くばかりでなく、告解という対応をしなければならないためである。学習の初期段階にある宣教師は日本語を表音文字であるローマ字表記に変換されたものを用い、日本語学習を行った。しかし、手書きで書き写すという作業は繁雑で、宣教師同士の知識の情報共有が十分になわず、同一の学びを共有することが難しく、日本語学習の効率が高まらなかった。この布教初期の学習の問題点を解消するため、イエズス会は 1590 年に印刷機を欧州から輸入した。当時の欧州では 15 世紀中頃にドイツ出身のグーテンベルクが考案した活版印刷技術による本の大量生産が実現しており、この輸入により同一の本による学びの共有が可能となり、宣教師の日本語学習の効率は向上したと思われる。しかし、この版本とそれ以前の手書きの写本ではローマ字を用いた日本語の表記法が異なった。

たとえば、写本と版本の長音表記法の違いをまとめると以下のようなものである。

写本の長音表記法	版本の長音表記法
<ul style="list-style-type: none">・ ^ , ~ , ' の 3 種の符号で表わす。・ 多くの長音箇所長音符号は省略される。	<ul style="list-style-type: none">・ ^ , ~ の 2 種の符号で表わす。・ すべての長音箇所に長音符号を付す。

長音という一つの事象をとりあげても、写本と版本では違いがみられる。また、これ以外にもローマ字を用いた表記法の違いが散見する。この表記法の変更は、日本語を母語としない宣教師たちの日本語の詳細な観察から生じた、より正確な日本語記述、または、より理解しやすい日本語学習法の構築の結果として生じたのかもしれない。彼らの母語とは異なる言語である日本語に対する表記法の変遷を正確に捉えることで、当時の日本語の実態、或いは日本語学習法の把握が可能になると思われた。

2. 研究の目的

本研究は、16 世紀後半から 17 世紀初頭にかけて来日した宣教師たちが作り上げたキリシタン・ローマ字文献における日本語表記法の調査・解明を目的とする。

従来のキリシタン文献を用いた研究は、主にポルトガル語で記されたイエズス会の資料から見た日本語表記の実態であり、当時少数ながらも同様に日本で活動していたスペイン語で記されたドミニコ会の資料の視点をも十分に含んだものではなかった。また、イエズス会の資料で、版本と写本で書写方法が異なるように、ドミニコ会の資料にも写本と版本があり、それを十分に調査した上で、表記方法の変遷をとらえる必要もあると思われた。この 2 つの集団と 2 つのメディアの違いによる表記の変遷を総合的にとらえることで、より精密に当時の日本語表記の実態把握につながる事が想起される。

3. 研究の方法

本研究は、実際の文献調査を行い、その表記を精緻に精査することで検証する。以下の過程を通して実施した。

スペイン、ポルトガル、イタリア、パチカン等の図書館、文書館で所蔵される、日本の中世

におけるキリシタン資料の閲覧、データ収集を行い、収集資料の電子テキスト化を行う。

研究を進めるうえでの基礎的な整備と平行して、調査および分析方法を確立させる。言語データの調査と分析は電子テキストを中心に進め、調査結果の把握には Excel を利用する。調査は常に原本の状態を参照しつつ行い、電子テキストに過度に依存したことで生ずる見落としや勘違いを防ぐこととする。

作成した電子テキスト、Excel データを利用し、各文献で用いられるローマ字表記法の実態を精査し、そこに見られる日本語表記法についての考察を行う。

4. 研究成果

(1) 資料収集

スペインのスペイン国立図書館(マドリッド)、スペイン王立歴史アカデミー(マドリッド)、アウグスティノ修道院(パリャドリッド)、サン・ロレンソ図書館(エル・エスコリアル)にてキリシタン文献の資料調査を行った。撮影可能な資料は撮影を行い、できない資料は複写申請を行い、データ収集を行った。この資料調査で入手した情報をテキストデータ化し、ローマ字表記法の実態の精査を行った。

ポルトガルのポルトガル国立図書館(リスボン)、アジュダ図書館(リスボン)、リスボン科学アカデミー(リスボン)、エヴォラ図書館(エヴォラ)にてキリシタン文献の資料調査を行った。撮影可能な資料は撮影を行い、できない資料は複写申請を行い、データ収集を行った。この資料調査で入手した情報をテキストデータ化し、ローマ字表記法の実態の精査を行った。

バチカンのバチカン図書館(バチカン)、イタリアのイエズス会ローマ文書館(ローマ)、カサナテンセ図書館(ローマ)、アンジェリカ図書館(ローマ)、アンブロシア文庫(ミラノ)にてキリシタン文献の資料調査を行った。撮影可能な資料は撮影を行い、できない資料は複写申請を行い、データ収集を行った。この資料調査で入手した情報をテキストデータ化し、ローマ字表記法の実態の精査を行った。

(2) 仮名・ローマ字綴り対照表

現代語の発音に基づき、イエズス会のキリシタン版(印刷された辞書・宗教書・文学書)のローマ字表記をまとめた。それに向け、ロドリゲス『日本大文典』『日本小文典』および「バレット写本」のような写本類での異なる表記、ドミニコ会資料における表記についても精査した。

(3) 「バレット写本」の長音表記分析

イエズス会ローマ字写本資料のバチカン図書館所蔵「バレット写本」(Reg.Lat.459)における日本語長音表記を分析した。「バレット写本」の長音に対応するアセント符号を見る限り、この本では書写の段階に本文書写段階・注釈段階があり、長音に対応するアセント符号は本文書写段階では´を、注釈段階では^と`が用いられている。´は単なるo、uでないマークとして利用されていたが、長音を示すにあたり^と`という長音専用符号を用いることで、´から長音の表示という機能を切り離していった。こういった三つのアセント符号が写本で併用されていたのは、1591年から始まるキリシタン版の印刷で表記の規範が確立されていく以前の名残とも言える。

(4) キリシタン文献・ローマ字本のウ段長音表記変遷

キリシタン文献・ローマ字本でウ段長音に対応する箇所には、主にアセント符号 \sim が使用されるが、 \wedge も用いられる。ウ段長音表記併用の要因として印刷の影響について検討した。ウ段長音表記対応箇所に複数のアセント符号が併用されたのは、版面担当者の判断で行われた可能性が高い。版面担当者がこの対応をとったのは、そもそもウ段長音にオ段長音のような音韻的対立が見られないため、本語におけるアセント符号の利用と同様に u の上に何らかのマークを付すことで視覚的に単なる u とは異なることを明示することにつながったためである。

(5) キリシタン文献・ローマ字写本の \sim

イエズス会士マノエル・パレト神父が書写したローマ字に付されるアセント符号の \sim と \wedge を見る限り、この 2 つのアセント符号が左傾・右傾という対立で使い分けられていないことがわかる。このことから、単なる o、u でないことを示すためのマークとして用いられた \wedge が、書記上の都合により \sim として表されることがあると推定した。

(6) 「ことばの和らげ」の見出し語

キリシタン・ローマ字文献各資料のローマ字表記法を確認するにあたり、本文テキスト内に存在する難語などを抜き出し、それに対する説明を施し ABC 順に並べた語彙集である「ことばの和らげ」を詳細に観察したところ、本文テキストに記載のない語が見出し語として採録されていることがわかった。また、この語彙集には『日葡辞書』に採録されてはいないものの、『日葡辞書』誕生以前の宣教師たちが日本語学習において取りあげていた語の存在も確認できた。

今回の研究では新型コロナウイルス感染症拡大防止に伴う渡航制限があり、研究の初期段階で資料調査を行うことができなかった。そのために、既存の資料やデータを扱い、研究を行うことになった。そういった事情もありドミニコ会の資料を扱った調査、研究は十分に行うことができていない。ただ代わりにキリシタン文献に付随される「ことばの和らげ」についての精査を行い、ここでの表記や語釈などについて、また新たな知見を得ることができた。この知見については今後の研究でさらに発展させていく予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 4件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 7件）

1. 著者名 千葉軒士	4. 巻 20(1)
2. 論文標題 『コンテムツス・ムンヂ』（1596）の「ことばの和らげ」採録語の出所について：A部からC部まで	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 金城学院大学論集. 人文科学編	6. 最初と最後の頁 178-192
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 千葉軒士	4. 巻 6
2. 論文標題 『コンテムツス・ムンヂ』（1596）の「ことばの和らげ」採録語の出所について-G部からM部まで-	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 中部大学リベラルアーツ論集	6. 最初と最後の頁 22-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 千葉軒士	4. 巻 16
2. 論文標題 『コンテムツス・ムンヂ』（1596）の「ことばの和らげ」採録語の出所について D部からF部まで	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 現代教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 千葉 軒士	4. 巻 115
2. 論文標題 キリシタン文献・ローマ字本のウ段長音表記変遷について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 名古屋大学国語国文学	6. 最初と最後の頁 96～81
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18999/nagu.115.96	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 千葉 軒士	4. 巻 15
2. 論文標題 『ドチリナキリシタン』(1592)の「ことばのやわらげ」採録語の出所について -A部からN部まで-	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 中部大学現代教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 63-73
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 千葉 軒士	4. 巻 5
2. 論文標題 19. 『ドチリナキリシタン』(1592)の「ことばのやわらげ」採録語の出所について -Q 部からZ 部まで	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 中部大学リベラルアーツ論集	6. 最初と最後の頁 56-69
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 千葉 軒士	4. 巻 17
2. 論文標題 キリシタン・日本語ローマ字写本で用いられる ` について : 「パレト写本」を中心に	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 名古屋言語研究	6. 最初と最後の頁 43~54
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.18999/nagl.17.43	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

[学会発表] 計3件(うち招待講演 0件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 千葉 軒士
2. 発表標題 キリシタン文献・ローマ字本のかち書き方針変更の一要因について
3. 学会等名 訓点語学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 千葉軒士
2. 発表標題 キリシタン・日本語ローマ字本「ことばのやわらげ」の出所未詳語について
3. 学会等名 キリシタン語学研究会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 千葉軒士
2. 発表標題 キリシタン 版・ウ段長音 表記について -活字数量による検討-
3. 学会等名 キリシタン語学研究会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 中部日本・日本語学研究会	4. 発行年 2022年
2. 出版社 和泉書院	5. 総ページ数 17
3. 書名 研究叢書542 中部日本・日本語学研究論集	

1. 著者名 岸本恵実、白井純	4. 発行年 2022年
2. 出版社 八木書店出版部	5. 総ページ数 3
3. 書名 キリシタン語学入門	

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------